様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１５日現在

機関番号：８４４１３
研究種目：若手研究 S
研究期間：2007～2011
課題番号：１９６７２００１
研究課題名（和文）　中国隋唐時代の俑に関する総合的研究

研究課題名（英文）　Synthetic Studies on Tomb Figurines in the Sui and Tang Dynasties

研究代表者
小林　仁（KOBAYASHI HITOSHI）
財団法人大阪市博物館協会・大阪市立東洋陶磁美術館学芸課・主任学芸員
研究者番号：00373522

研究成果の概要（和文）：
隋唐時代の俑に関して紀年墓を中心とした出土資料の調査、撮影を実施し、豊富なデータを蓄積しながら各時代各地域の俑の特質について考察を行った。それらの資料を基に、美術史的観点から隋唐時代の俑の様式変遷と地域性の解明を行い、従来注目されることの少なかった地域の様相を明らかにするなど多くの成果を得た。さらに、陶磁史的視点から制作技法や製品の流通の問題などを明らかにし、俑研究の新たな可能性を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：
This study discusses the characteristics of tomb figurines (*Yong*) by period and region produced in the Sui and Tang dynasties. It is based on rich data compiled from investigation and photographing of the materials excavated mainly from dated tombs. The resource made a remarkable contribution to elucidating the stylistic transition and regional characteristics of the *yong* figurines from an art historical context, the latter in particular being a significant accomplishment since it had not been receiving much attention in the past. From the aspect of ceramic history, it proposed a new potential to the studies of *yong* figurines by clarifying the production techniques and the issue of distribution system at that time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学／美学・美術史
キーワード：美術史、俑、隋、唐、陶磁史

１．研究開始当初の背景
墓に副葬される明器である俑は、中国美術史において重要な研究テーマの一つである。出土資料の豊富な隋唐時代の俑について、体系的かつ総合的な美術史的研究はこれまでほとんどなく、研究代表者がこれまで実施してきた南北朝時代の俑に関する調査、研究成果を踏まえ、国内外で活躍する研究協力者と連携を図りながら、隋唐時代の俑について、出土資料の調査を基礎とした体系的かつ総合的な研究を実施したいと考えるに至った。

２．研究の目的
紀年墓を中心とした隋唐時代の俑の出土

資料の詳細な調査を実施することにより、各時代・各地域の俑の特徴を把握しながら、様式変遷と地域性、そして制作技法や工房生産など多角的な視点から、隋唐時代の俑の成立と展開を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、１）中国各地での現地調査による出土資料に即した実証的研究、２）陶磁史や考古学など多角的な視点からの総合的研究、３）中国各地の研究者との学術交流と協力関係、などの実績と経験を基礎に、従来ほとんど試みられなかった美術史的観点から、隋唐時代の俑の様式変遷と地域性の解明に主眼を置く点に最大の特色がある。また、専門である陶磁史の立場から、俑の制作技法や生産工房の問題まで扱う点も本研究の特色といえる。さらに、実証的な美術史研究にとって必要不可欠な作品調査の際には、造形特質や制作技法の一層の理解のため、完形品のみならず陶片（破片）類も調査対象とし、従来あまり注目されることのなかった彫塑美術としての俑の新たな側面に焦点を当てるなど、美術史研究の一ジャンルとしての俑研究の新たな可能性を示していきたい。

４．研究成果

隋唐時代の俑に関して紀年墓を中心とした出土資料の調査、撮影を実施し、豊富なデータを蓄積しながら各時代各地域の俑の様相を理解することができた。それらの資料を基に、美術史的観点から隋唐時代の俑の様式変遷と地域性の解明を行い、従来注目されることの少なかった地域の様相を明らかにするなど多くの成果を得た。さらに、陶磁史的視点から、制作技法や製品の流通の問題などを明らかにし、俑研究の新たな可能性を提供することができた。実際には中国現地調査とテーマ研究を相互に関連させながら研究を実施してきたが、以下主な地域ごとに、主要な成果について簡単にまとめる。

（１）西安地区

陝西省考古研究院では整理中の長安区出土隋唐墓群の出土資料を特別に調査することができ、とくに隋時代の紀年墓資料は隋俑の編年、分期研究にとって重要な意義をもつものとなった。また、個人所蔵の西安唐醴泉坊窯址及び平康坊窯址出土の唐代の俑の陶笵資料を調査することができた。陶笵の出土例はわずかであることから、俑の製作技術を理解する上でこれらの資料的価値は極めて大きい。さらに今回は特別にその陶笵を使っての成形実験を行い、陶笵成形がかなりの精度で成形が可能である点とともに想像以上に熟練の技が必要であることが理解でき、陶笵が単なる大量生産用の安易な手段ではないということを明らかにした。昭陵博物館では、未報告資料も含め昭陵陪葬墓出土の黄釉加彩俑を中心とした初唐俑について調査を行い、黄釉加彩俑の特質とその産地などについての新たな見解を学会や論文で発表した。とくに、陶磁史的な観点から黄釉加彩俑を唐三彩俑の全段階として位置付け、俑の装飾が釉上加彩技法としての黄釉加彩から多色施釉法としての唐三彩へと展開したことについて明らかにした。

（２）山西地区

長治市博物館では長治地区出土の唐代の俑の調査を行い、長治を中心とした山西東南部において独自の俑の様式が見られることを確認した。また、山西省襄垣県では近年出土の隋唐俑を特別に調査することができ、一部「瓷質」と報告されている俑が邢窯産である可能性が高いことが分かり、邢窯産の唐代の俑の流通の問題を考える上で新知見が得られた。山西地区の唐代の俑については、これまであまり注目されてこなかったが、西安地区や洛陽地区と異なる独自の様式が初唐段階にすでに存在していたことが確認でき、とりわけ盛唐に見られる豊満スタイルの源流が山西地区にある可能性など唐俑研究における山西地区の重要性を新たに指摘することができた。

（３）河北地区

河北省の永年県では紀年墓である孫信墓出土の唐俑などを特別に調査することができた。河北地区の唐俑はこうした紀年墓資料によれば、ほぼ 7 世紀代の初唐期に集中していることが確認できた。研究代表者はこうした河北地区の陶俑が邢窯産であると考えたが、その後、実際に河北邢台において邢窯で近年出土した陶俑及び仏教陶塑像類の大量の一括資料を実見することができ、邢窯が河北地区の陶俑の一大生産地であることが確認できたことは大きな収穫であった。白磁で有名な邢窯だが、とくに初唐期においてこうした陶俑をはじめとした多彩な素焼きの陶製品が大量に生産されていた事実は、邢窯の全体像を考える上でも重要な意義をもつものといえる。さらに、こうした邢窯産の初唐の俑が近隣の山西東南部はもとより、後述するように遠く遼寧朝陽地区まで流通していたことを論文などで初めて明らかにした。

（４）湖南、湖北地区

湖南省では岳州窯（湘陰窯）の隋唐時代の俑及びその生産状況について調査を行い、とくに青瓷俑は湖南地区内のみならず、近隣の湖北地区や四川地区などにも流通していた状況が確認でき、湖北隋墓出土の一部の俑も岳州窯産である可能性が高いことが分かった。また、湖北省襄樊市では近年唐墓と報告された墓葬出土の陶俑が南朝墓のものであることを明らかにするとともに、新たな唐俑の資料を実見

することができ、南北境界地域にある襄樊の南朝から隋唐にいたる陶俑の変遷と地域的特殊性を考える上で大きな収穫となった。

（５）江西地区

江西省博物館では未報告の唐三彩俑資料を実見でき、唐三彩俑の分布と流通を考える上で重要な発見となった。また、洪州窯窯址とその出土資料を調査し、洪州窯産青磁の実体について理解を深めた。それにより、湖北地区の調査で実見した青磁明器類の一部が洪州窯産である可能性が高いことが分かり、俑をはじめとした明器類の流通や地域性の解明に新たな手がかりが得られた。

（６）河南地区

河南省では中国古陶瓷学会主催の「中国早期白瓷、白釉彩瓷専題学術研討会」に参加し、早期白磁の年代の問題や隋時代の白磁俑に関する研究成果の発表を行った。北魏とされた鞏義白河窯窯址出土の白磁や青磁の年代に疑義を呈するとともに、隋時代の安陽張盛墓の白磁俑の産地について邢窯の可能性を指摘し注目を集めた。また、西安地区を中心に出土の見られる初唐の黄釉加彩俑について河南地区、とりわけ鞏義窯産の可能性を指摘した。鞏義窯での隋唐俑の出土は現時点ではまだわずかであるが、唐三彩俑をはじめ高火度焼成の白瓷俑などの時代や産地について多くの新知見が得られ、隋唐俑の一大拠点ともいえる河南地区の隋唐俑の様相を解明する大きな基礎が得られた。また、唐三彩俑については河南地区をはじめ各地の資料を集成し、唐三彩俑が従来の説よりも早く衰退することを明らかにするなど、唐三彩俑の今後の編年研究の上で大きな収穫が得られた。

（７）遼寧地区

遼寧省文物考古研究所と遼寧省博物館では、蔡須達墓はじめ朝陽地区の初唐墓出土の俑の調査を行い、その中に河北邢窯産や河南鞏義窯産と考えられる製品がかなりの割合で流入していることを確認し、朝陽地区の初唐俑の特殊性を学会や論文などで初めて指摘した。これは、当時の明器である俑の流通の問題や一大窯業地である邢窯や鞏義窯の製品流通を考える上で大きな意義を持つものとなった。

（８）江蘇地区

徐州市博物館において徐州地区の隋唐墓出土の俑や関連資料を調査した。とくに隋代の俑の様式は安徽省のものとも共通性が見られ、南北境界に位置するこれらの地域の隋俑の様式について多くの新知見が得られた。

（９）その他

上記以外で特筆すべきものとして、甘粛慶城県出土の一群の加彩胡俑がある。その一部は陝西歴史博物館の展示で実見することができたが、極めて高い造形性と表現を見せており、甘粛東南部の唐俑の造形的特殊性、仏教塑像との関連、さらには産地などの問題を考える上で大きな収穫となった。

〔まとめ〕

隋唐時代の俑の出土例は現在膨大な数に上るが、報告書や簡報などを集成するとともに、様式変遷や編年などを考える上で重要な各地の紀年墓出土例を中心に現地調査を実施した。現在中国の博物館の展示品は写真撮影が基本的に許可されていることもあり、各地の博物館の関連資料について膨大な写真データを蓄積することができた。また、博物館や研究所などでは、現地研究者の協力を得ながら、特別な調査と撮影も行うことができた。立体造形である俑の美術史的研究を行う上で、実際に手にとり詳細な観察を行うことができたことは極めて大きな意味をもち、多くの新知見が得られた。こうして隋唐時代の俑研究の貴重なデータ蓄積を行うことができたことは本研究の最も基本となる部分であり、ある中国の研究者にいわせるとこの分野では中国でもこれだけの資料を調査したものはいないとのことであった。さらに、生産工房や制作技法の解明に関連して、窯址の調査や窯址出土の陶片資料や陶笵資料、さらに墓葬出土の俑の破片資料についても各地で調査することができ、陶磁史的な観点からのアプローチをする上で大きなメリットとなった。その資料的価値にもかかわらず、中国美術史、陶磁史研究では俑をメインとした研究は国内外でまだ少ないのが現状で、少なくとも今回の調査研究者この点では最先端をいくものといえ、なおかつ俑研究のもつ新たな可能性を提供することができたと考える。実際に、これまでの学会での口頭発表や論文発表は中国の研究者にも高く評価をされている。今後はテーマごとに更なる研究成果の公表を予定しており、さらに最終的には今回の研究成果を踏まえた隋唐の俑に関する体系的、総合的な美術史的研究としてまとめていきたいと考えている。

一方、今回の調査は日本の研究協力者はもちろん、中国の多くの研究機関や研究協力者の理解と協力があって実現したものである。とりわけ、中国各地の博物館や研究所の研究者からは全面的な協力が得られた意義は大きい。従来から交流のある研究者はもちろん、今回新たに知り合った研究者からも友好的協力が得られ、調査を円滑に進めることができた。また、考古学的知見など様々な点について教示を受けることができ、各地で友好的な学術交流を行うことができた。こうした学

術交流を通し、堅固な研究協力関係とネットワークを築くことができたことは、今後の更なる研究においても大きな財産となったことを最後に強調しておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①小林仁、「北斉鉛釉器的定位和意義」『故宮博物院院刊』、投稿中

②小林仁、「北斉鄴城地区的明器生産及其系譜―以陶俑和低温鉛釉陶為中心」中国古陶瓷学会編『中国古陶瓷研究（第16輯）』、査読無、紫禁城出版社、2010年、505－524頁

③小林仁、「白瓷的誕生―北朝瓷器生産的諸問題與安陽張盛墓出土白瓷俑【中国語】」、小林仁、中国古陶瓷学会編『中国古陶瓷研究（第15輯）』、査読無、紫禁城出版社、2009年、61-78頁

〔学会発表〕（計８件）

①小林仁、「初唐黄釉加彩俑的特質與意義」、中国鞏義窯陶瓷学術研討会、2011年6月17日、北京市

②小林仁、「浅説北斉釉陶器」、首届国際磁州窯論壇、2010年10月26日、河北省磁県

③小林仁、「北斉鄴城地区的明器生産及其系譜―以陶俑和低温鉛釉陶為中心」、2010年河北邯鄲中国古陶瓷学会年会暨磁州窯学術研討会、2010年10月24日、河北省邯鄲

④小林仁、「唐代青瓷俑考―長江中流域の隋唐時代の俑に関する諸問題―」、東洋陶磁学会研究例会、2010年2月13日、大阪市立東洋陶磁美術館

⑤小林仁、「初唐期の俑の特質について―陝西・河南地区を中心に」日本中国考古学会2009年度大会、2009年11月22日、筑波大学

⑥小林仁、「白瓷的誕生―北朝瓷器生産的諸問題與安陽張盛墓出土白瓷俑【中国語】」、中国古陶瓷学会“中国早期白瓷、白釉彩瓷専題学術研討会”、2009年10月22日、河南省鄭州

⑦小林仁、「中国唐時代の俑の制作技法について―陶笵成形を中心に―」、民族藝術学会第112回研究例会、2008年11月1日、国立民族学博物館

⑧小林仁、「山西省の唐時代の俑について」、東洋陶磁学会研究例会、2008年6月28日、大阪市立東洋陶磁美術館

〔招待講演〕（計２件）

①小林仁、「隋唐陶俑研究的新視角」、復旦大学文物與博物館学系学術講座、2011 年 12 月 14 日、上海・復旦大学

②小林仁、「中国の陶俑―その魅力と謎」、出光美術館第 264 回水曜講演会、2009 年 8 月 26 日、出光美術館（講演録は『出光美術館館報』149 号、150 号、2009 年に掲載）

〔図書〕（計２件）※図書掲載論文

①小林仁、「唐代邢窯俑生産及流通相関諸問題」北京芸術博物館編『中国邢窯』中国華僑出版社、318-326 頁、2012 年

②小林仁、「初唐黄釉加彩俑的特質與意義」北京芸術博物館編『中国鞏義窯』中国華僑出版社、347-360 頁、2011 年

〔その他：講座・レクチャー等〕（計７件）

①小林仁、「河南省鞏義窯研究の最前線－“鞏義窯陶瓷学術検討会”参加報告」、学芸員アフタヌーンレクチャー第 22 回、2011 年 6 月 26 日、大阪市立東洋陶磁美術館

②小林仁、「“中国早期白瓷、白釉彩瓷専題学術研討会”及び“中国紅緑彩瓷器専題学術研討会”参加報告」、東洋陶磁学会第 38 回総会特別報告「世界の陶磁史研究動向」（中国）、2010 年 5 月 15 日、東京藝術大学（『東洋陶磁学会会報』第 72 号、2010 年に要旨掲載）

③小林仁、「中国の白瓷の誕生をめぐって―中国古陶瓷学会“中国早期白瓷,白釉彩瓷専題学術研討会”参加報告」、学芸員アフタヌーンレクチャー第 10 回、2009 年 11 月 7 日、大阪市立東洋陶磁美術館

④小林仁、「中国早期青瓷の諸問題」、研究講座「中国陶磁史研究の最前線Ⅱ―海外の研究動向紹介」、2009 年 9 月 26 日、大阪市立東洋陶磁美術館

⑤小林仁、「中国隋唐時代の俑について―平成 20 年度科学研究費補助金（若手研究Ｓ）の調査報告―」、学芸員アフタヌーンレクチャー第 7 回、2009 年 3 月 7 日、大阪市立東洋陶磁美術館

⑥小林仁、「唐代女俑の美」、ミュージアムウィークス大阪 2008 記念大阪市立東洋陶磁美術館公開講座「中国陶磁の魅力」、2008 年 10 月 11 日、大阪市立東洋陶磁美術館

⑦小林仁、「中国白瓷史話―北朝隋唐を中心に」平成 20 年度東洋陶磁入門講座「白磁の歴史と新知見」、2008 年 8 月 24 日、大阪市立東洋陶磁美術館

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　仁（KOBAYASHI HITOSHI）

財団法人大阪市博物館協会・大阪市立東洋陶磁美術館学芸課・主任学芸員

研究者番号：00373522

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし